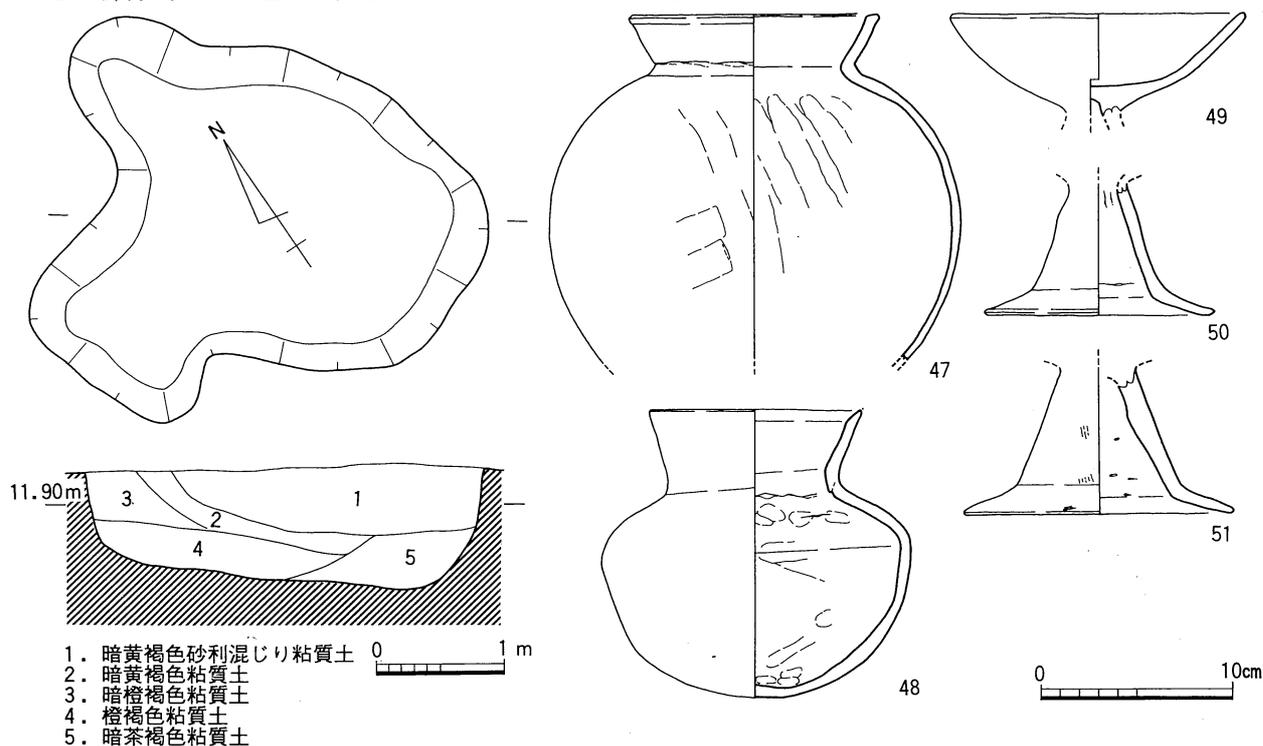


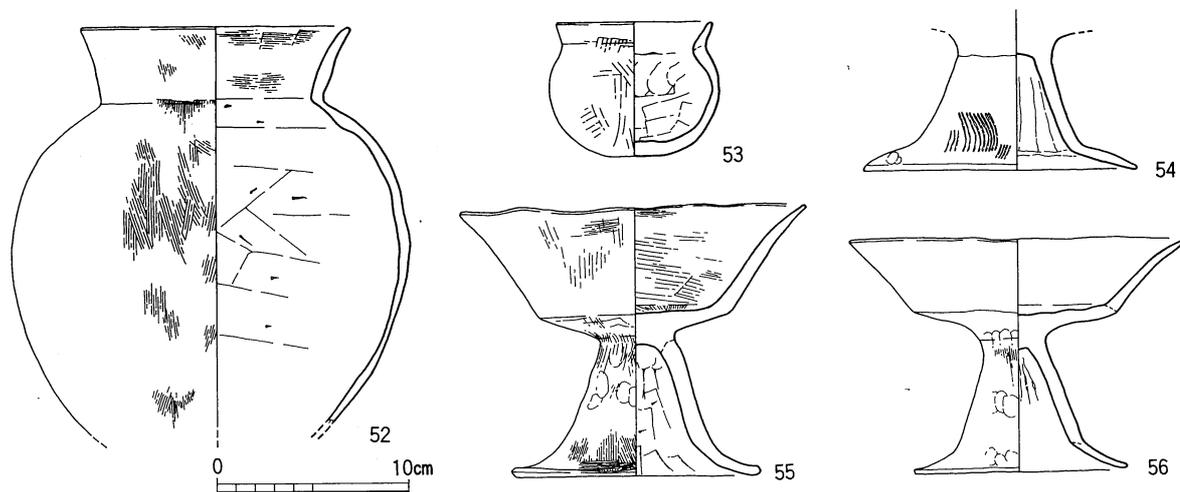
面は板ナデ、体部内面には指ナデが顕著である。49の杯部は直線的に立ち上がる。全体に摩滅している。50・51は杯部の下位で屈曲するが、とくに内面で鋭い。50は全体に摩滅している。51の外面は摩滅しているが部分的にハケ目が残る。内面にはヘラケズリを施す。



第96図 F 1区第1面SK47平・断面図(1/60),出土遺物(1/4)

C 1区第2面SR01 調査区の北壁から南側へ11mほどで収束するものである。北側はC 3区の西側を経て路線北側へ続いている。調査区内での最大幅は7.3m、深さは1.0mほどである。埋土は大きく上下2層に分かれ、上層には褐色系の粘土が、下層には黒褐色系の粘土が堆積していた。遺物は主に下層の下部から出土しており、南西方向から投げ込まれたような状況で出土した。

52は甕で、口縁部は直線的に斜め外方に立ち上がり、外面はハケ目の後に上半部を強くナデており、内面にはハケ目を施している。体部は球形で体部最大径は中央にある。外面はハケ目を、内面は全体に

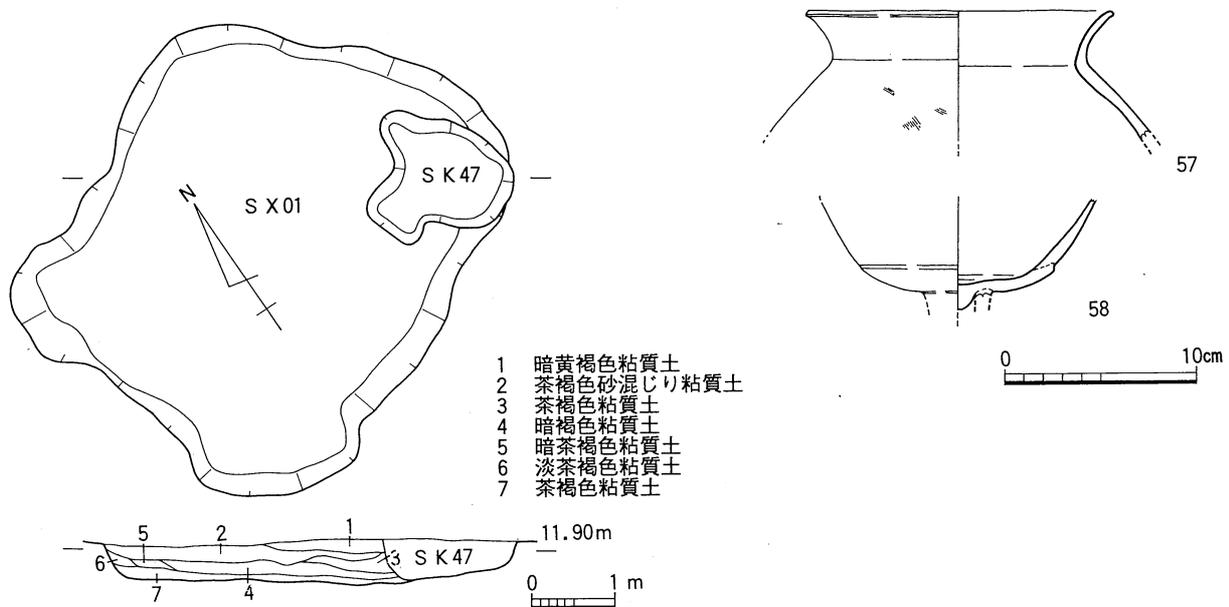


第97図 C 1区第2面SR01出土遺物(1/4)

ヘラ削りを施している。53の口縁部は短く直線的に立ち上がる。体部はやや扁平な球形で、外面には粗いハケ目を施し、内面は上半部には指押しさを、下半部には板ナデを施している。また底部は板ナデのため平底気味になっている。54~56の脚部はいずれも上半は幅広で、下半部が大きく屈曲して開くものである。55の杯部は屈曲して大きく開き深くなっている。端部は外側に屈曲して先細りである。内・外面にハケ目を施している。また口縁部は少々歪んでいる。56の杯部は立ち上がり部が丸みを帯びており、端部付近で直線的に外反する。全体に摩滅している。

**F 1 区第 1 面 S X 01** F 1 区の南東部で検出した落ち込み状遺構である。東側を S K 47 により切られる。平面形は正方形に近い。規模は南北4.5m、東西5.4m、深さ0.4mである。埋土中と底部には多量の拳大の円礫がある。竪穴住居の可能性も考えたが、柱穴等は検出できなかった。出土した土器も少量にとどまったため、土器等の廃棄土坑ともいいがたく、性格については不明である。

土器は埋土中より甕 (57)、高杯 (58) が出土している。57は口縁部を強く外湾させ、端部を丸く収める。体部外面は摩滅しているが部分的にハケ目が残っている。58は杯部下位に小さく段があり、そこから外上方に延びる。

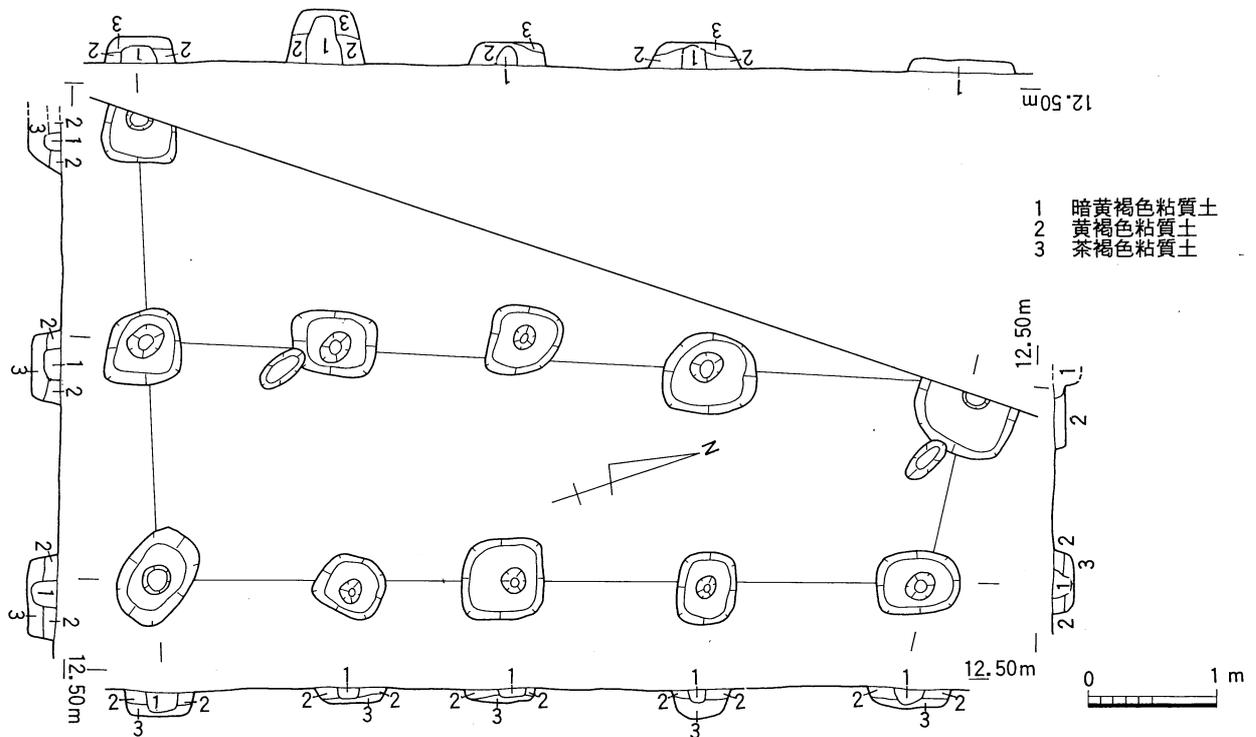


第98図 F 1 区第 1 面 S X 01 平・断面図 (1/90), 出土遺物 (1/4)

### 古代

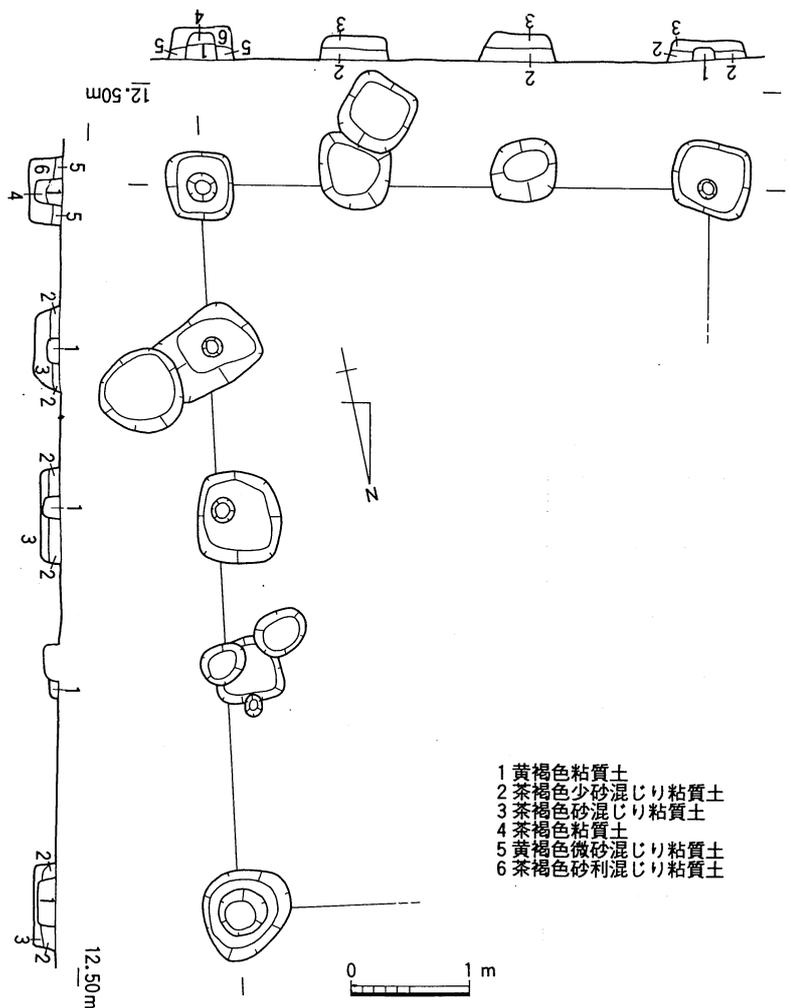
**F 1 区第 1 面 S B 01** F 1 区北西部で検出した総柱の掘立柱建物である。西側の柱穴の一部は調査区外となり、約半分を検出している。検出部分で桁行 4 間 (6.0m)、梁間 2 間 (3.6m)、建物の推定面積 21.6 m<sup>2</sup> である。主軸方位は N-18°-W である。柱穴掘方平面は不整形であり、径 0.5~0.7m である。断面は逆台形であり、深さ 0.15~0.45m である。大部分の柱穴で柱痕を確認することが出来た。出土遺物は柱穴から弥生土器、土師器の小片が出土したのみであり、时期的な検討は難しい。だが、掘方の規模、後述する S K 06, 33 等の土坑から 8 世紀前半の須恵器、土師器が出土していることからこの時期のものと考えたい。

**F 1 区第 1 面 S B 02** F 1 区南西部で検出した、南北棟の掘立柱建物である。桁行 4 間 (6.3m)、梁間 3 間 (4.4m)、面積 27.7m<sup>2</sup> である。主軸方位は N-8°-W である。柱穴掘方平面は不整形であり、



第99図 F1区第1面SB01平・断面図 (1/60)

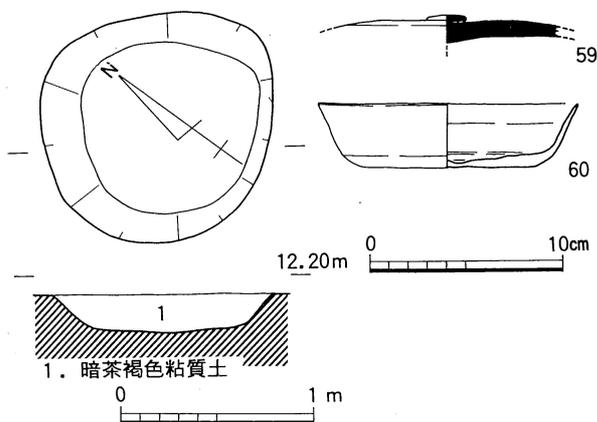
径0.5~0.7mである。断面は逆台形であり、深さ0.15~0.3mである。出土遺物はやはり、弥生土器、土師器の小片のみであるが、主軸方位、掘方の規模がSB01と類似するため8世紀前半の建物と考えたい。



第100図 F1区第1面SB02平・断面図 (1/60)

F 1区第1面S K 06 F 1区中央北部で検出した土坑である。平面形は隅丸方形である。径は約1.2mであり、深さは0.2mである。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

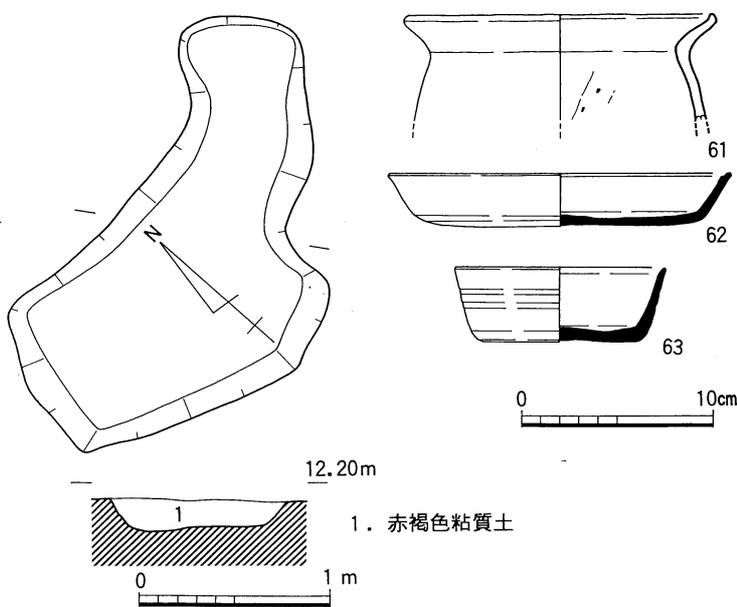
土器は須恵器の杯蓋 (59), 土師器の皿 (60) が出土している。59は宝珠つまみを持つ。外面は回転ヘラケズリと回転ナデを施す。60は外方にまっすぐ延びるが口縁端部付近を強くナデることにより少し外反させている。底部はヘラ切りで、中央部分の器壁は極端に薄くなっている。



第101図 F 1区第1面S K 06平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/4)

F 1区第1面S K 33 F 1区中央北部で検出した土坑であり、SH06, SH09を切っている。平面形は不整形である。規模は南北で最大1.5m, 東西で最大2.3m, 深さ0.2mである。埋土は赤褐色粘質土の単一層で焼土とカーボンを含み、底部は被熱によりわずかに赤化しているので、焼成土坑と考えられる。

土器は土師器の甕 (61), 須恵器の皿 (62) ・杯 (63) が出土している。61は口縁端部をつまみあげている。体部の張りはなく、外面は摩滅しているが内面にはヘラケズリを施している。62は口縁部端部を強くナデているため、内面側に沈線状の線が巡っている。底部をヘラ切り

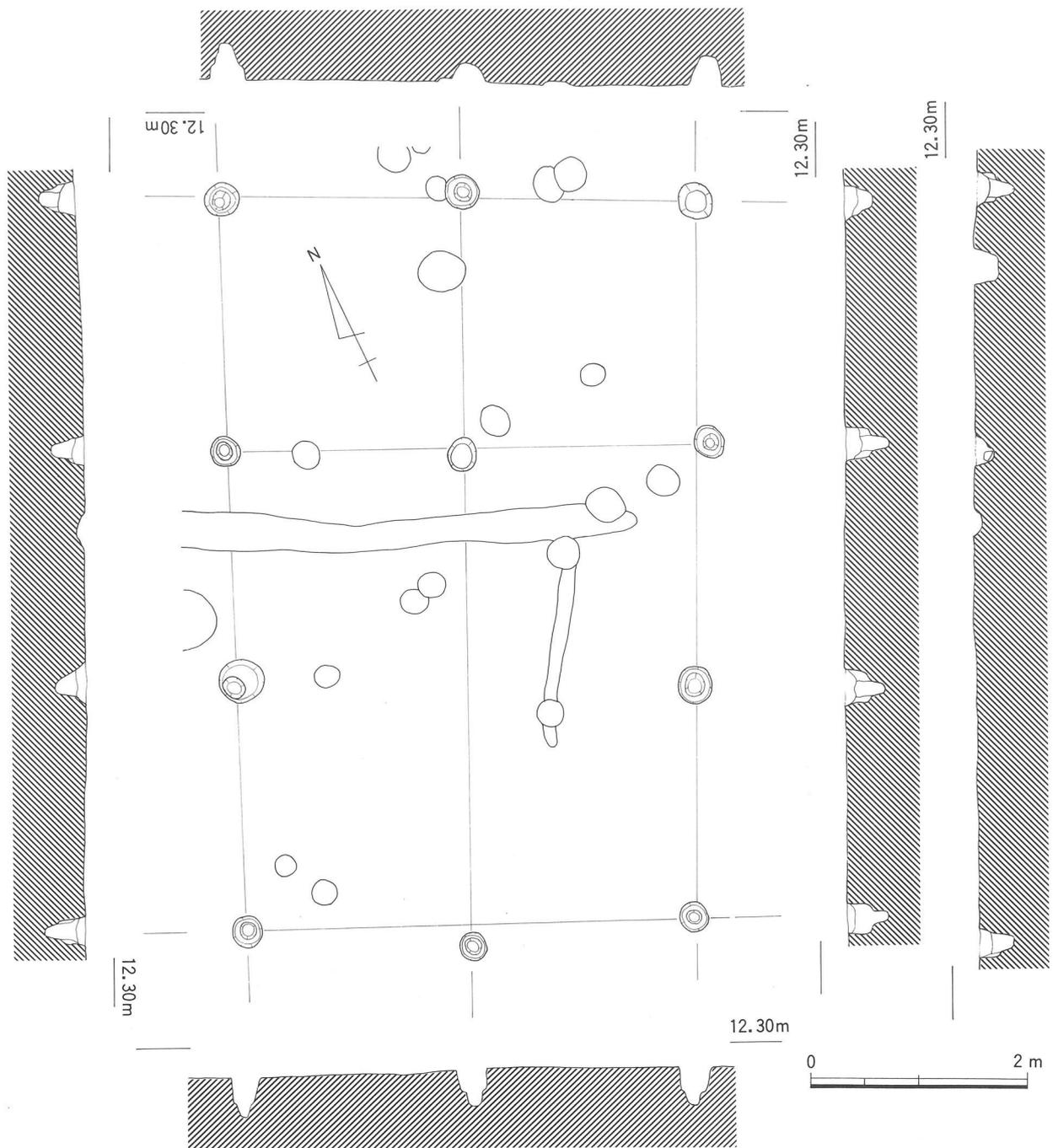


第102図 F 1区第1面S K 33平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/4)

している。63の口縁部の立ち上がりは急である。体部は回転ナデを施し、底部内面には仕上げのナデを行っている。底部をヘラ切りしている。

## 中世

B区第1面S B 01 調査区南東隅において検出された掘立柱建物である。桁行3間 (6.9m) × 梁間2間 (4.4m) を測る。主軸方位はN-65° Wを向く。また、西から桁行2列目の梁間中央列の柱穴を欠く。柱穴は円形で断面形はU字形である。埋土は褐灰色のシルトである。柱穴からの出土遺物はいずれも小片で時期決定は困難であるが、近接し同様の埋土をもつ柱穴より13世紀に比定される土師器の杯が出土していることから、S B 01の帰属時期は13世紀としておく。他にB区第1面ではS B 01の東側に一部調査区外に延びるが、確認される範囲で桁行2間×梁間1間でほぼ真北を向く掘立柱建物を確認している。また、調査区西端で一部が攪乱によって消滅しているが、桁行2間×梁間2間でほぼ真北を向く掘立柱建物を確認している。全体の規模については攪乱を受けたり調査区外に延びるために不明である。主軸をS B 01と違えるが同様の埋土をもつことなどから、ともにS B 01と同じく13世紀に比定される。



第103図 B区第1面S B01平・断面図 (1/60)

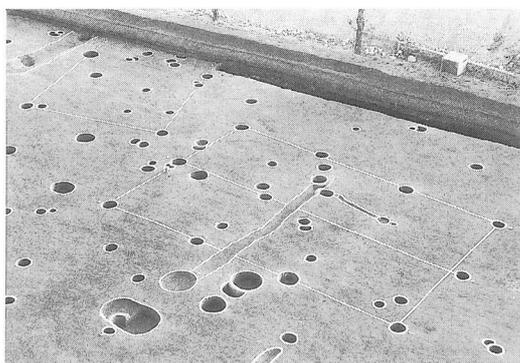


写真81 B区第1面S B01・02 (北より)

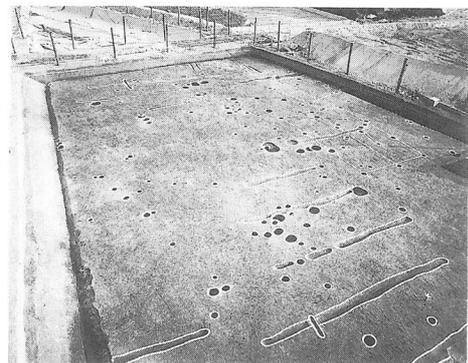


写真82 B区第1面完掘状況 (北西より)

D 2 区第 1 面 S X 01 D 2 区は調査区東側の尾根筋から西へ傾斜する緩斜面に位置するが、S X 01は調査区中央において検出された井戸と思われる遺構である。規模は直径約 4 m の円形を呈し、北側は約 0.5 m 程突出平面プランを呈する。断面形は逆台形を呈するが、深さは完掘していないが、2.5 m 以上と思われる。中位より下層はラミナ状堆積を示す砂質土グライ化した粘土層がほぼ交互に見られる。約 2 m 程で湧水点である砂層に達し、調査中も多量の湧水を確認した。

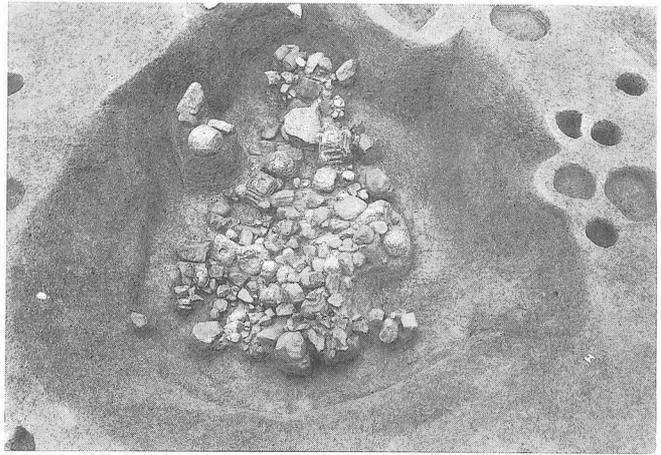
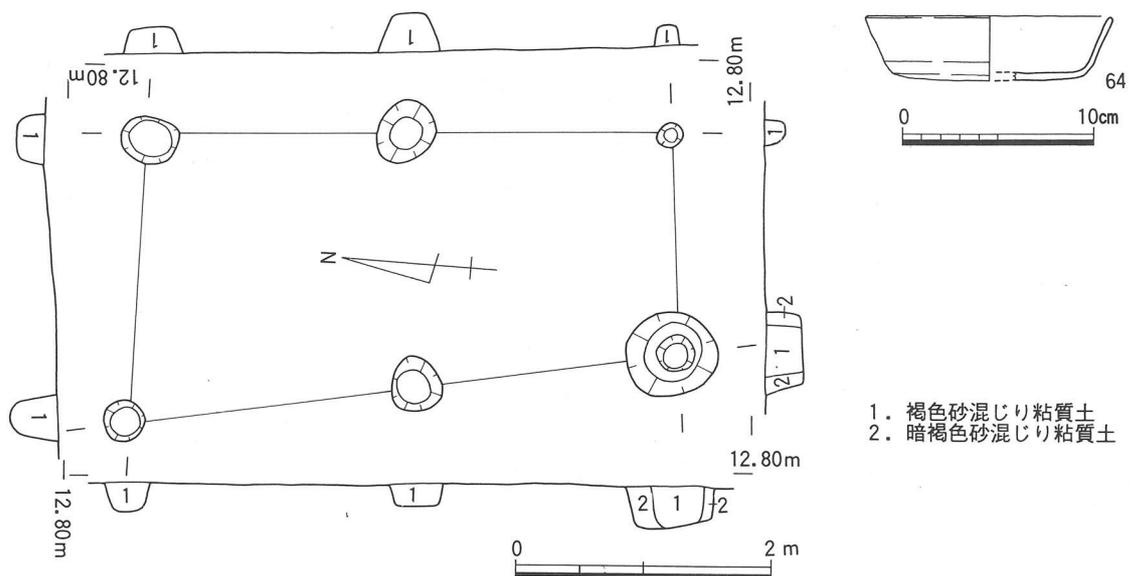


写真83 D 2 区第 1 面 S X 01 検出状況 (南より)

出土遺物は 14 世紀代に比定される備前焼の播り鉢、羽釜の脚部がある。他に五輪塔の空輪・風輪・火輪・水輪、宝篋印塔の笠の部分が出土している。すべて白色凝灰岩製である。

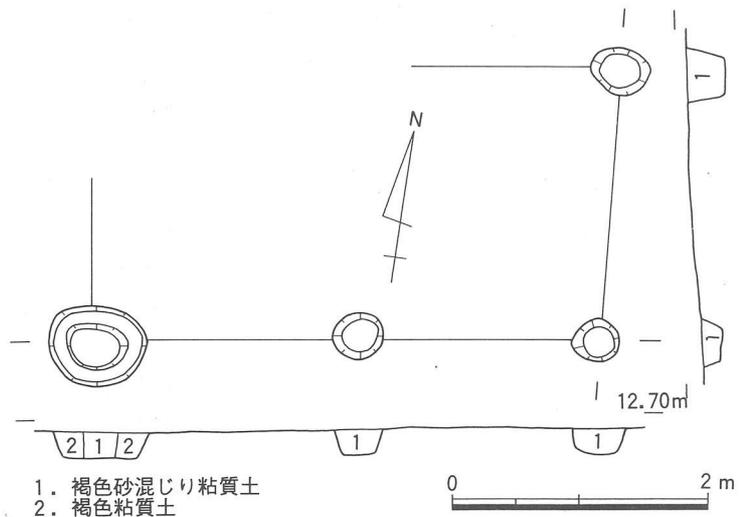
G 1 区第 1 面 S B 01 G 1 区の中央部で検出した掘立柱建物である。桁行 2 間 (4.4 m)、梁間 1 間 (2.2 m)、面積 (9.8 m<sup>2</sup>) である。主軸方位は N-10°-W である。柱穴の掘方平面は不整形円形であり、径 0.2~0.7 m である。南東コーナーの柱穴が他のものに比べて小さくなっているが、逆に南西コーナーのものは最も大きい。断面は逆台形であり、深さ 0.2~0.4 m である。柱穴の埋土は褐色砂混じり粘質土である。

土器は S P 29 より土師器皿 (64)、図化していないが土鍋の足が出土している。64 は体部中央から口縁部にかけて外上方に延びる。底部はヘラ切りされている。



第104図 G 1 区第 1 面 S B 01 平・断面図 (1/60), 出土遺物 (1/40)

G1区第1面SB02 G1区の北東部で検出した掘立柱建物である。北側の桁行のうち検出できた柱穴は1基のみである。桁行2間(4.0m), 梁間1間(2.1m), 面積(8.2m<sup>2</sup>)である。主軸方位はN-82°-Eであり, SB01とほぼ直交している。柱穴の掘方平面は不整円形であり, 径0.3~0.7mである。断面は逆台形であり, 深さ0.2~0.3mである。柱穴の埋土は褐色砂混じり粘質土である。柱痕が確認出来たものは1基である。遺物は出土していない。



第105図 G1区第1面SB02平・断面図(1/60)

G1区第1面SK15 G1区の南東部で検出した焼成土坑である。平面形は隅丸方形に近い。規模は南北3.1m, 東西1.6m, 深さ0.14mである。断面は北側で急に落ち込み, 南側へ緩やかに立ち上がる。焼土は中央から北寄りに分布し, 南北の両脇付近に特にカーボンが集中する部分が広がる。平面, 断面の形態, 多量のカーボンを含むことから炭窯の可能性はある。土器は細片のみである。

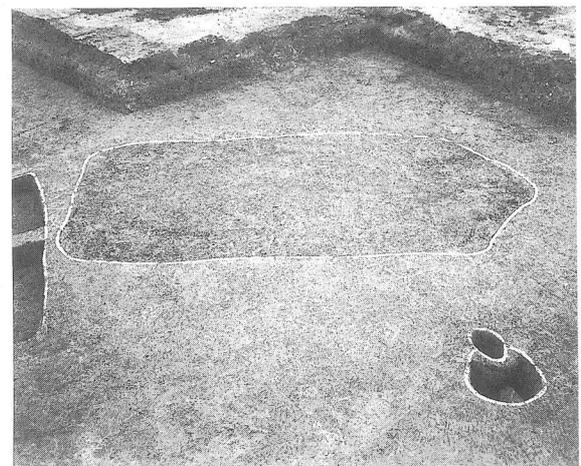
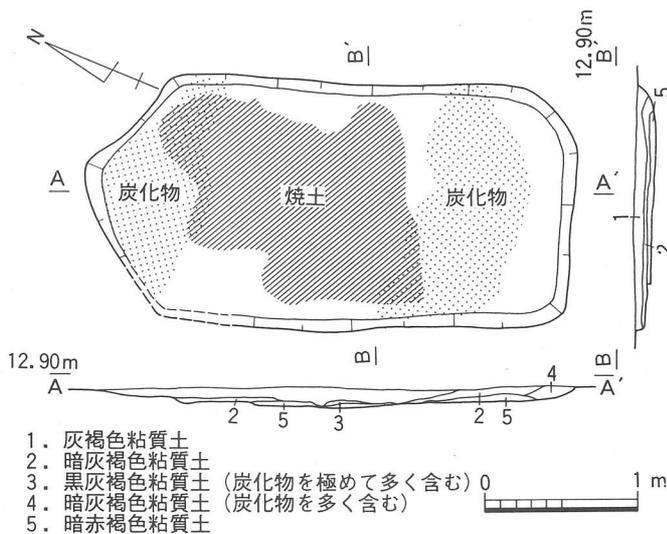
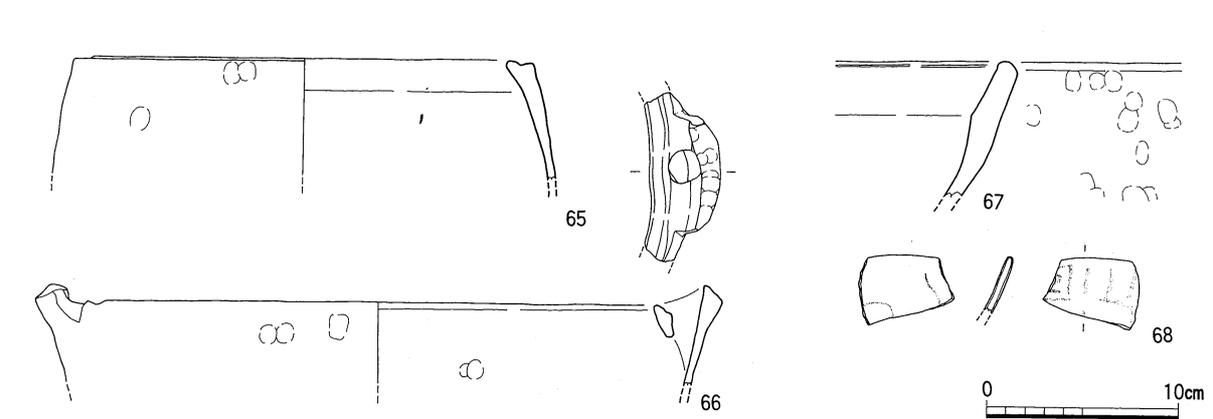
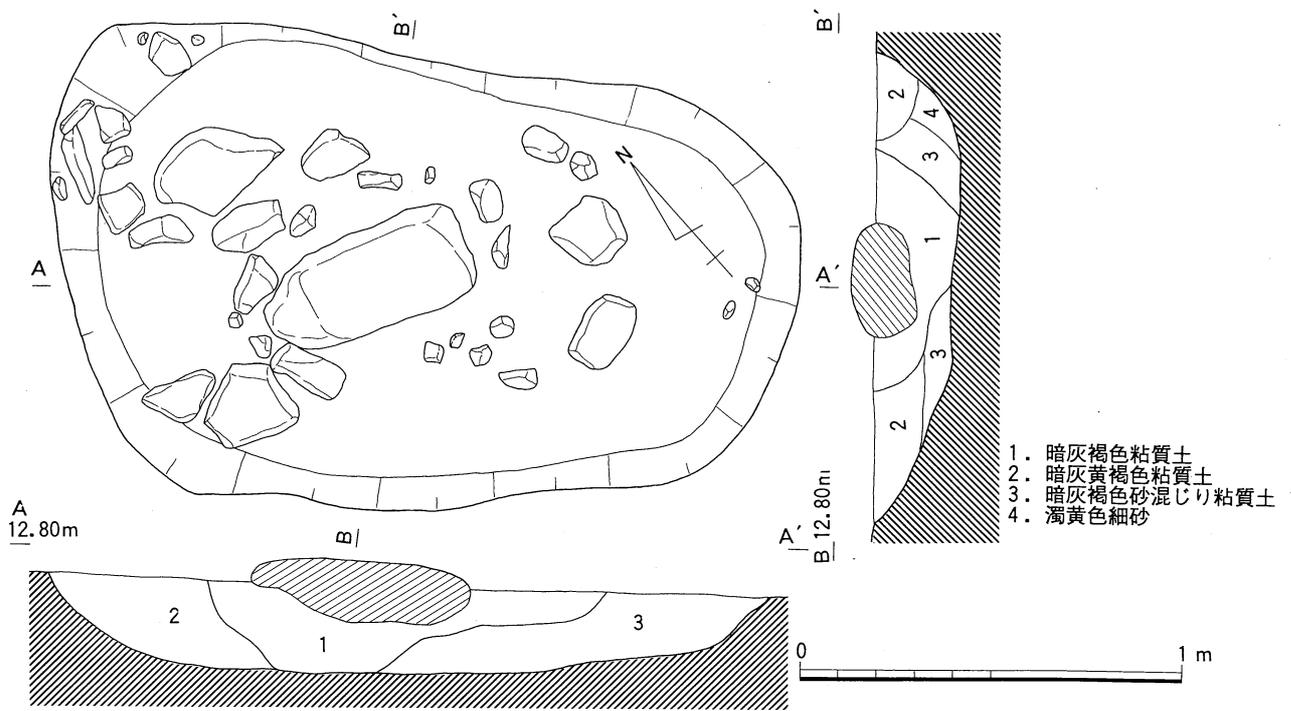


写真84 G1区第1面SK15検出状況(東より)

第106図 G1区第1面SK15平・断面図(1/50)

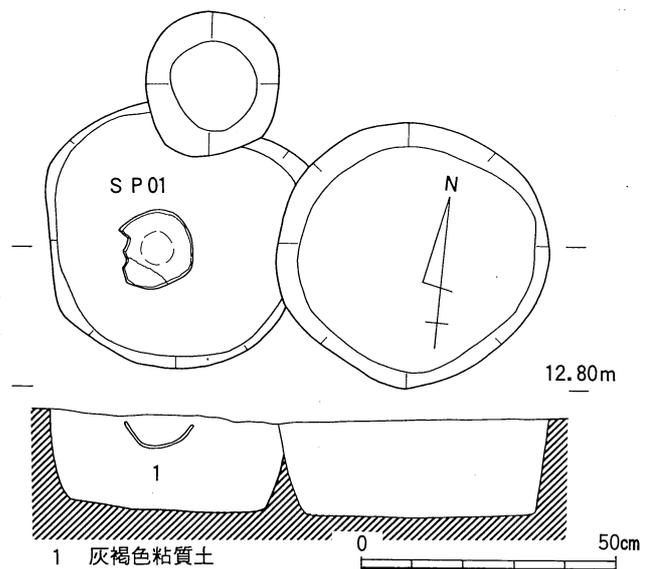
G1区第1面SK20 G1区の中央部で検出した集石土坑である。平面形は楕円形である。規模は南北1.1m, 東西1.9m, 深さ0.24mである。中心部に長さ0.55m, 幅0.25mのひときわ大きな石を置く。これを標石と見れば, 墓である可能性もある。その他の石は並べたというほど整然としておらず, 大石と高さも同じくらいである。これらの内1点は砥石である。

土器は土師質土器羽釜(65,66), 土鍋(67), 青磁碗(68)が出土している。65は口縁端部に1条の沈線を施す。体部外面は指押さえの後ナデている。66は把手が付いている。円孔は上から下に向かって, 開けられている。67は体部外面を指押さえした後ナデを施している。68は内外面ともに文様を施しているが, 小片のため意匠は不明である。



第107図 G1区第1面SK20平・断面図(1/20), 出土遺物(1/4)

G1区第1面SP01 G1区の中央部で検出した柱穴である。2つの柱穴で切られている。平面形は円形であり、径0.54m、深さ0.2mである。十瓶山系瓦質土器椀(69)が口縁部を上に向けた状態で中央部から出土している。検出面より2cm下に口縁部があり、柱を抜き取ったあと埋められたものである。



第108図 G1区第1面SP01平・断面図(1/15)

出土土器は69のみである。69は十瓶山産瓦質土器碗である。体部が内湾気味に外上方に延びる。底部には断面台形の高台が付く。

G1区第1面SP02 G1区の中央部から検出した柱穴である。SP02からは直線距離で南東に5mである。平面形は円形であり、深さ0.2mである。土師器皿(70)を2枚重ねた上に永楽通宝を乗せた状態で出土している。いずれも口縁部を上に向けている。検出面より2cm下に口縁部があり、柱を抜き取ったあと埋められたものであろう。70は体部が外上方にまっすぐ延びる。

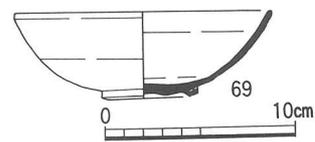
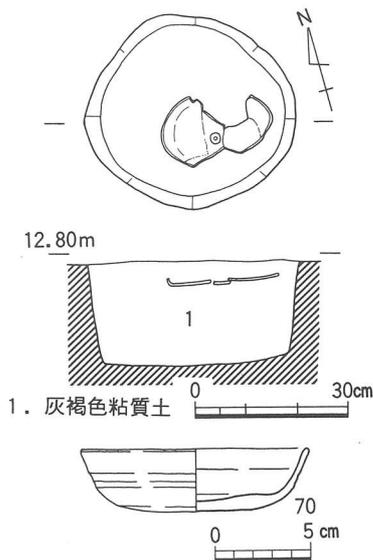


図109 G1区第1面SP01出土遺物(1/4)



第110図 G1区第1面SP02平・断面図(1/15), 出土遺物(1/4)

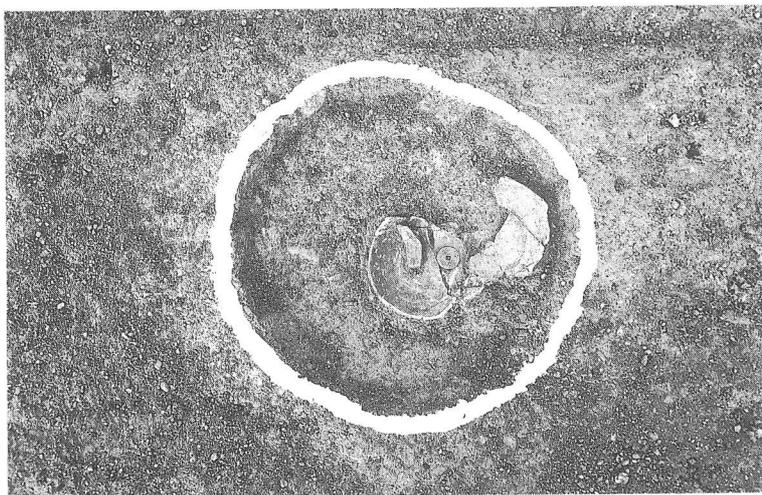


写真85 G1区第1面SP02遺物出土状況(南より)

G1区第1面SX01 G1区の東部で検出した集石土坑である。東側は調査区外であり、北側を別の土坑に切られるが、平面形は隅丸方形である。規模は現状で南北4.5m、東西2.7m、深さ0.3mである。人為的に拳大の河原石を凹字状に組んでいる。東側は石が散らばり気味であるが、元は西側と同様に整然と並べられていたものと思われる。土層断面の観察によれば、この礫群は一度遺構を埋め戻したあと再び掘りなおして、灰黄褐色少砂利混じり粘質土と石を混ぜながら入れている。西側でも10個余りの河原石がまとまってあるが、石の間に灰黄褐色小砂利混じり粘質土は見られなかった。出土土器は中世のものがほとんどであるが、古墳時代の須恵器(71, 72)が2点混入している。配列された礫群からすればなんらかの祭祀目的で掘りこまれた遺構であろうか。

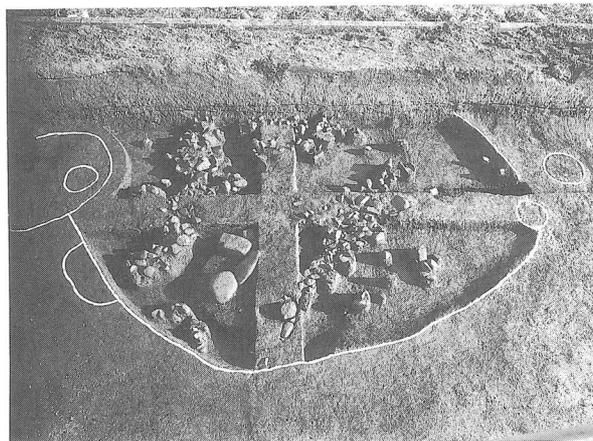
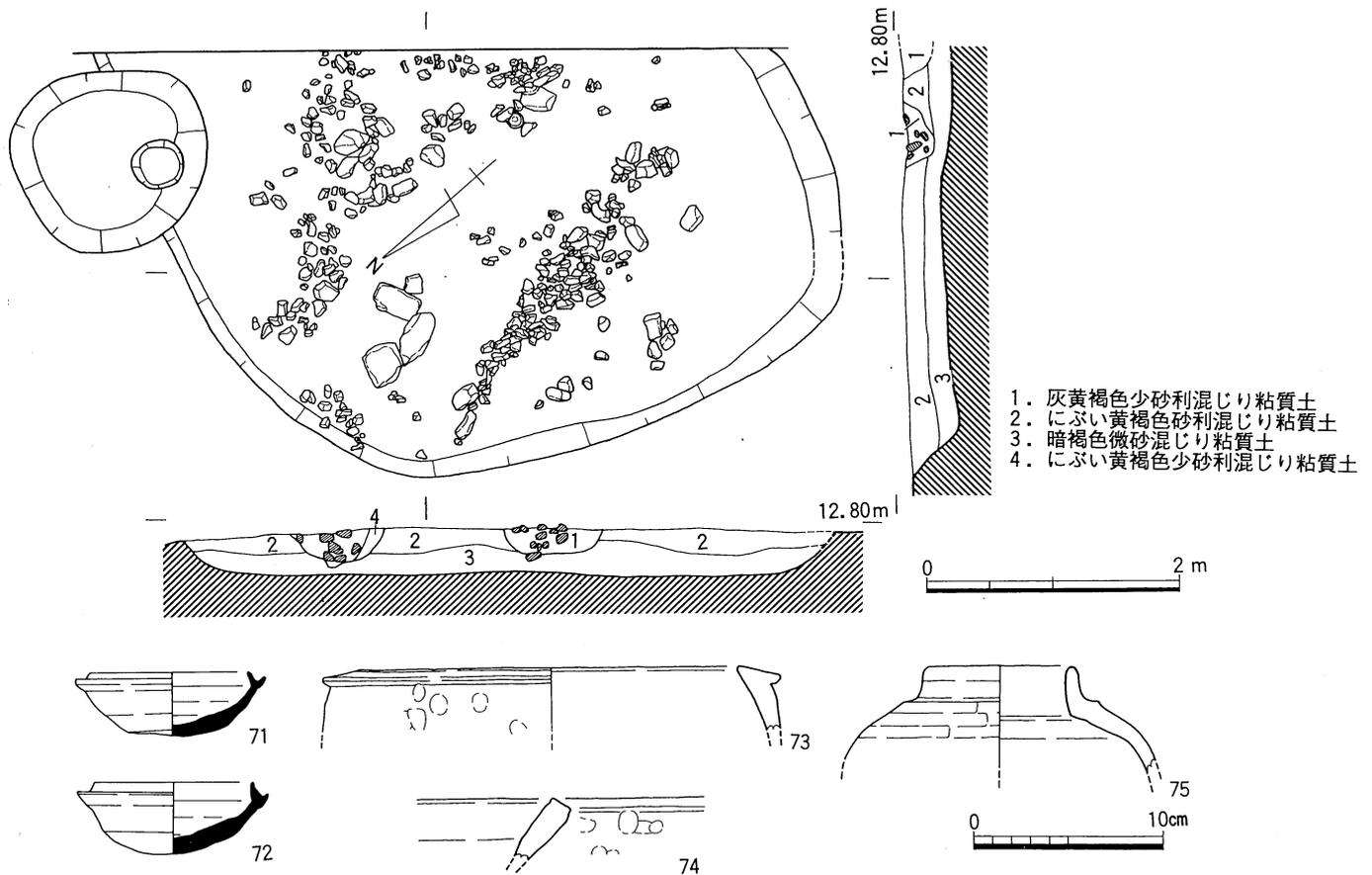


写真86 G1区第1面SX01全景(西より)

71, 72は須恵器の杯身である。径は10cmであり、同サイズである。底部はヘラ切りを施す。73は土師質土器羽釜である。体部外面には指押さえの後ナデを施している。74は土師質土器鉢である。口縁端部に1条の沈線を施す。体部外面は指押さえの後ナデている。75は土師質土器釜である。口縁部は直立し、端部を丸く仕上げている。



第111図 G1区第1面S X01平・断面図(1/60), 出土遺物(1/4)

### 3. まとめ

成重遺跡は東西に450mと長くなっているが、基本的に全調査区で遺構面を2面検出した。上面は古墳時代から中世、下面は一部古墳時代を含むが主として弥生時代の遺構・遺物をそれぞれ検出した。

上面の遺構としては古墳時代前半の竪穴住居跡を12棟検出した。平面形はいずれも方形のものである。竪穴住居跡はE区からF区にかけて広がる微高地に集中している。これに続く遺構として7～8世紀の掘立柱建物跡が2棟あり、この時代の遺構はF区の西側に集中していた。また明確な時期は不明であるが、中世と考えられる掘立柱建物がB区・C1区・C3区を中心に13棟ほど検出している。建物の主軸を目安とすると4グループほどに分かれる。2～3棟で1つの屋敷を構成しているようだが、区画溝などは伴っていない。また室町時代の遺構がG区で集中的に検出されている。土師器に銅銭を入れて埋納した遺構や焼土・炭化物を多量に含んだ土坑、掘立柱建物跡2棟などがある。

下面の遺構は竪穴住居跡、墳墓がある。竪穴住居跡は現時点で15棟検出している。竪穴住居跡は円形のもの10棟、方形のもの5棟である。弥生時代中期のもの1棟の他は、すべて弥生時代後期である。このうち直径8mを超えるものが5棟ある。

墳墓は墳丘墓(集石墓を含む)と考えたものが22基、方形周溝墓2基、土壇墓20基以上、土器棺墓2基がある。墳丘墓はすべて明瞭な墳丘をもつが、礫を多量に配するいわゆる集石墓と、礫を配するが盛土の部分が半々のもの(現段階では集石墓と考えている)、礫より盛土のほうが圧倒的に多いものの3タイプがある。多種多様な墓制が同時併存するのか、あるいは時期的に分かれるのかなどの分析は今後の

作業である。分布としてはE区からF区・G区の南半分には密である。すこし離れてC2区の南側にまとまりがある。墳丘墓は現段階で最も古いもので弥生時代中期中葉、新しいもので弥生時代後期後葉である。埋葬施設については土壙墓については木棺の有無などが確認できたが、墳丘墓については現段階で1基のみで確認しているにすぎない。今後調査が進展するにつれて埋葬施設も多数確認されるであろう。その段階で墓と確定できるものであるので、墳丘墓の数は今後、変動する可能性がある。

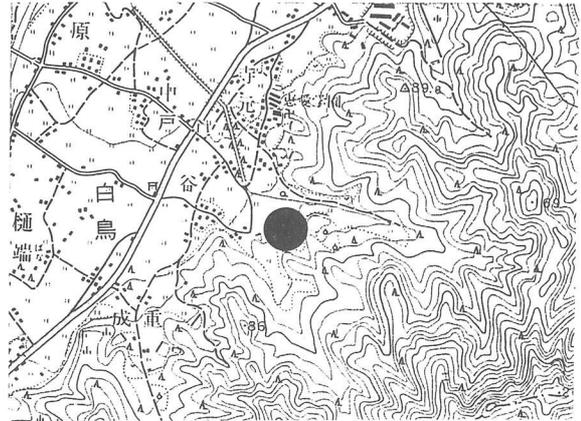
次年度以降の調査でさらに成重遺跡の全容に迫れるものと思う。墓域と居住域が分離が可能なのか、また墳墓の時期的な変遷を追うことなどを課題としたい。

# 善門池西遺跡

## 1. 立地と環境

善門池西遺跡は大川郡白鳥町白鳥谷に所在する。湊川水系新川の東岸に位置しており、小規模な尾根地形を挟んだ、東西の谷地形に立地している。

遺跡の範囲は、谷地形の開口部に、段丘崖状の地形が明瞭に認められることから、同部を北限とし、南方については、谷地形の収束部分を限界とすることが推測できる。



第112図 遺跡位置図

## 2. 調査の成果

調査は、東部の谷地形の西半部全域と、西部の谷地形の一部分について全面調査を実施した。

### 弥生時代

東部の谷地形の尾根地形に近い位置において、柱穴跡群を検出した。遺構の配列が不規則なために、建物遺構を復元するには至っていないが、同遺構群東方の傾斜面において、一括して廃棄されたことが想定できる弥生土器の集中箇所を検出したことから、当該位置が生活空間として利用されていたことは十分推測することができると考えている。

また、遺跡の東端部の埋没谷地形の埋積土中からは、弥生土器（弥生時代中期後半～後期頃）、有溝石錘、サヌカイト剥片を採取することができた。

### 中世

東部の谷地形の開口部と、西部の谷地形の開口部において、柱穴跡群、土坑、溝状遺構を検出した。このうち、柱穴跡については掘立柱建物跡を形成していたことが想定できるのであるが、各遺構の配列が不規則なために、建物遺構を復元することは困難である。

遺物は、遺構と埋没谷地形の埋積土中から、14世紀後半～15世紀前半頃の土師器皿、同土釜、東播磨系捏鉢、白磁、不明鉄製品が出土している。

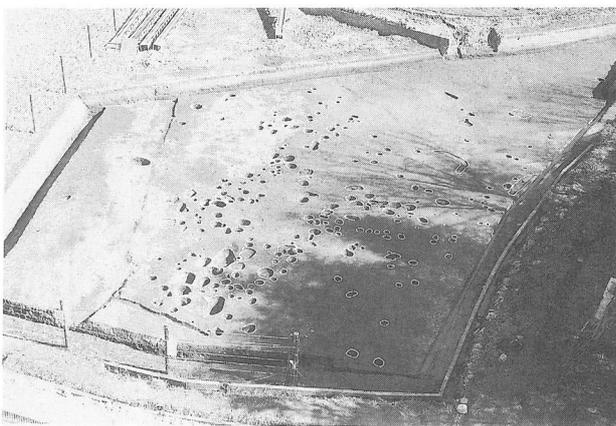


写真87 遺構検出状態

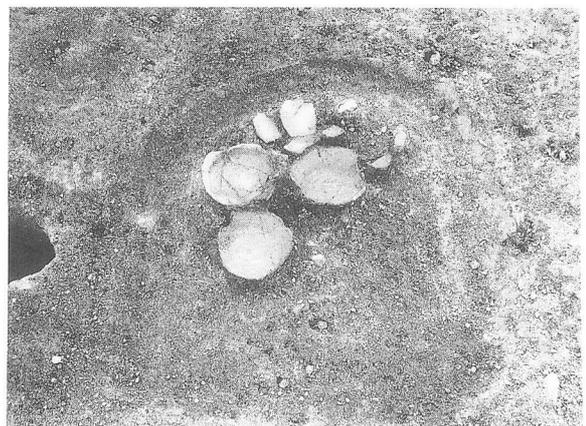
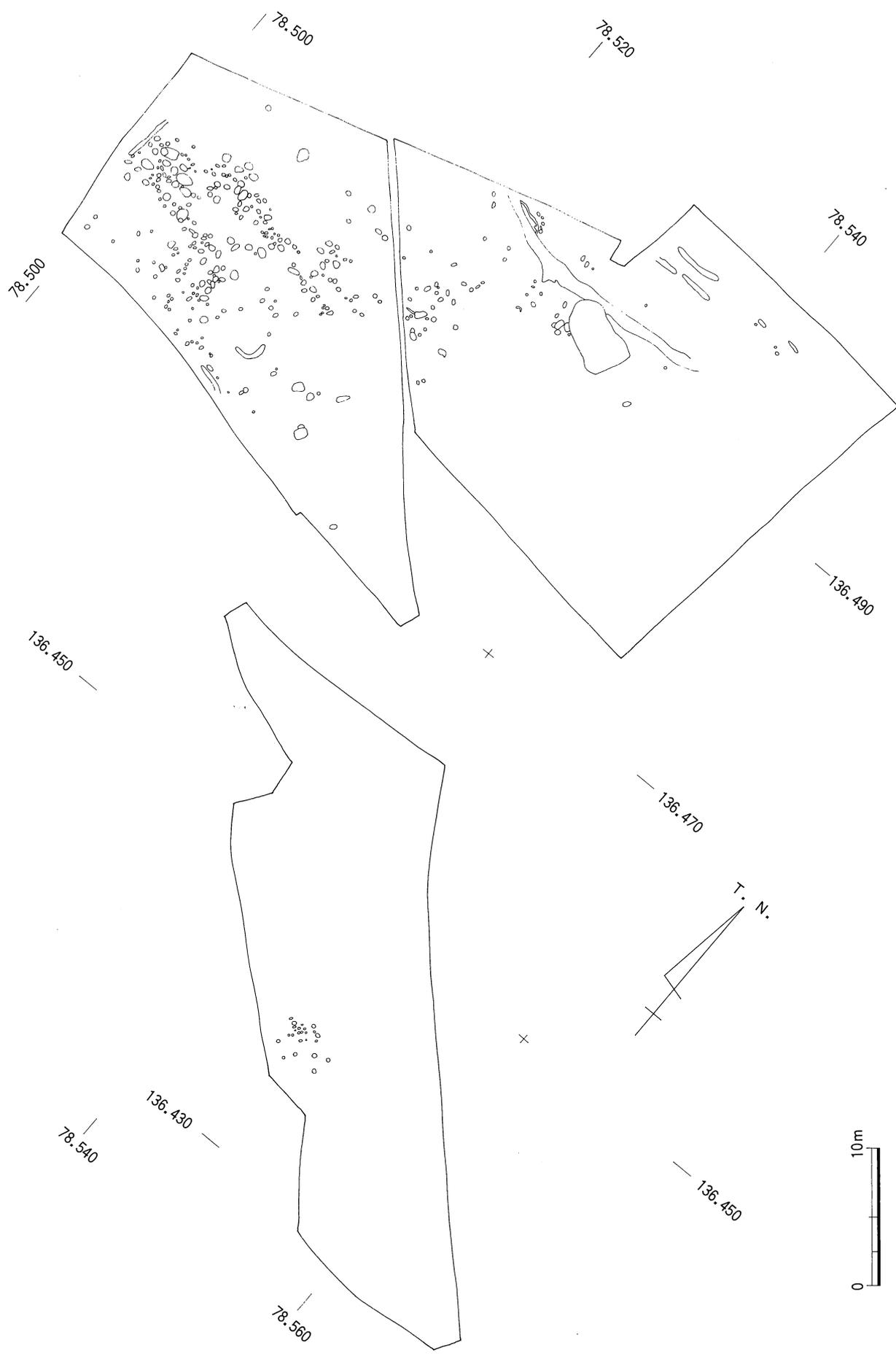


写真88 遺物出土状態



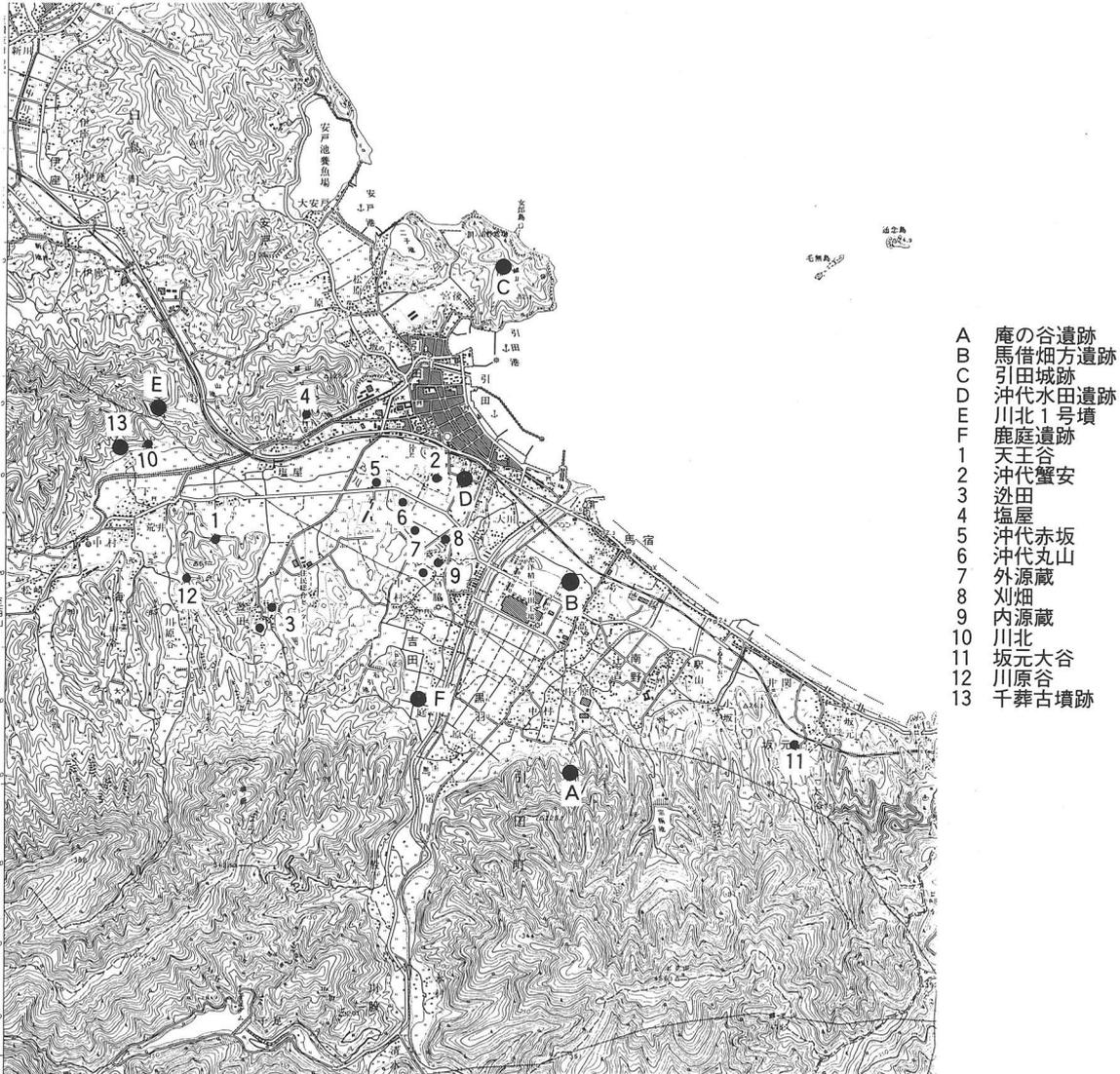
第113図 遺構配置図

# 庵の谷遺跡

## 1. 立地と環境

庵の谷遺跡は、大川郡引田町黒羽下内甲258外に所在し、讃岐山脈に連なるビク山の北にのびた尾根にはさまれた谷筋の出口あたりにあたる。遺跡から西方を望むと、馬宿川などによって形成された相生扇状地が広がっており、引田平野は山裾部までそのほとんどが扇状地地形にあたる。

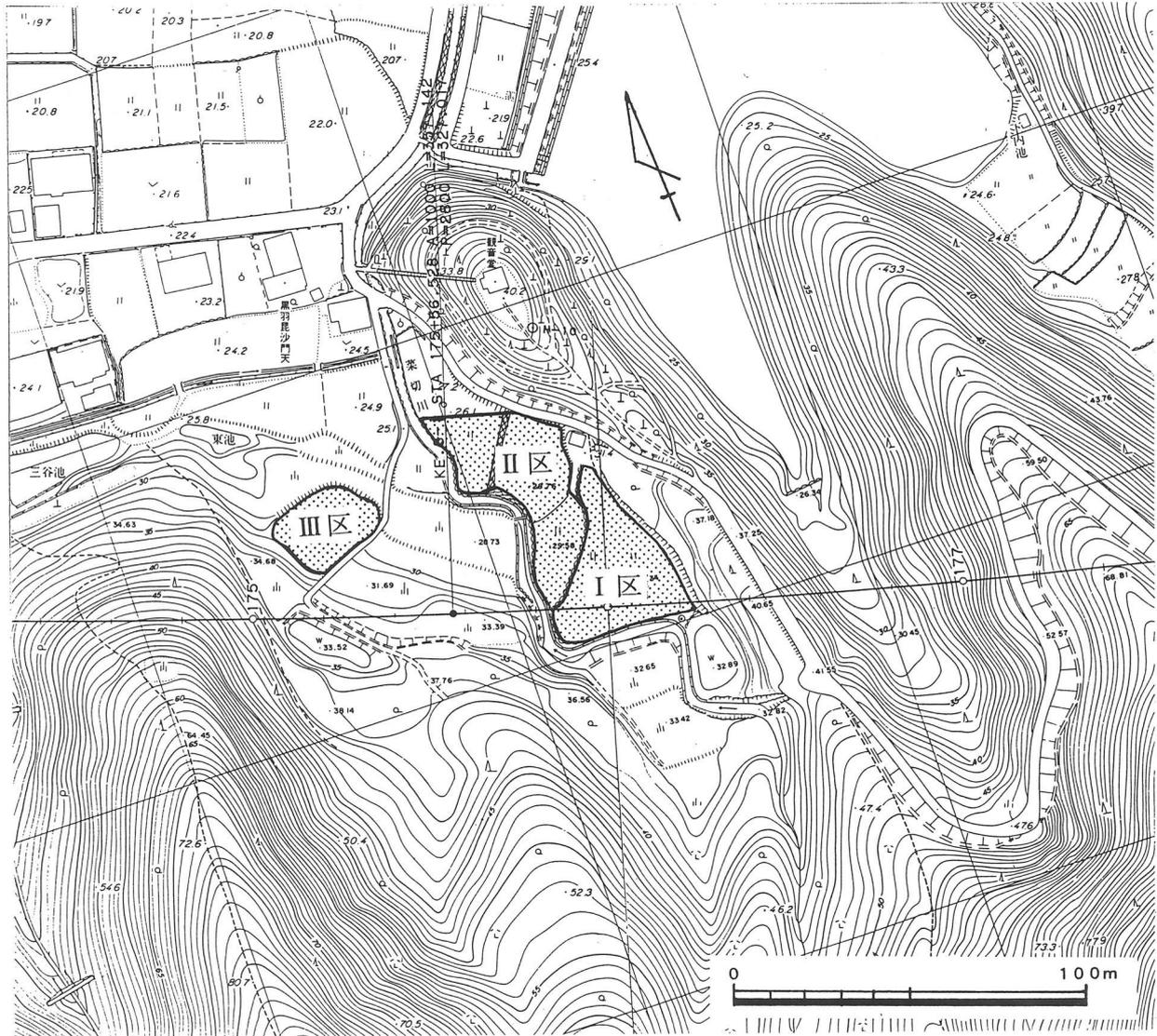
引田町内の遺跡については、縄文時代のものとして天王谷で黒曜石製石鏃が、弥生時代のものとして沖代蟹安で石臼・石斧片・土器片、迺田でサヌカイト製石鏃、塩屋で土器片が表面採集されている。古墳時代のものとしては、沖代水田遺跡で水田遺構とともにたくさんの須恵器が見つかり、沖代赤坂と中山池西で土器片が採集されている。古墳は、後期末の川北1号古墳が知られている。これは横穴式石室を持つ小円墳であり、周辺地区には、かつて数カ所の古墳があったとされるが、現存するのはこれのみである。古代のものとしては、外源蔵、刈畑、内源蔵で奈良時代の土器片が採集されている。中世のものとしては、川北、坂元大谷で平安時代の土器片が採集され、川原谷では備前焼の焼納骨壺が見つかった。



第114 遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/50,000)

ている。また、平成8年1月に調査された馬宿畑方遺跡では、奈良～平安時代初期の製塩土器が出土している。さらに、本年度の四国横断道津田引田間の予備調査において、鹿庭遺跡でピットと土師器片が多数見つかり、来年度に本格的な調査の予定である。引田町は、『延喜式』に古代官道の南海道の引田の馬家があったところとされ、「馬宿」や「駅山」といった関連する地名があるが、その所在については現在のところ不明である。近世のものとしては、戦国期から江戸時代初期まで用いられた山城である引田城跡がある。

## 2. 調査の成果



第115図 調査区割図 (1/2,000)

調査地は、ビク山の北へのびてくる尾根はさまれた北西に開けた谷筋の2級河川菜切川を挟んだ両側の標高30m前後の元水田で、発掘調査面積3000 $\text{m}^2$ について発掘調査を実施した。調査区は、菜切川の東岸の1段高い元水田をI区、他の部分をII区、西側の部分をIII区と設定した。現状では、I区からII区にかけては水田耕作のために階段状にされているが、元の地形は東側を北にのびる尾根から西の菜切川へ向かってだらだら下る斜面になっていた。今回は、I区の調査成果についてのみ報告を行う。



第116図 I区遺構配置図

I区では、現地表面から東側で0.2m余り、西側のII区との境で約2m余り下に東から西に厚く最大厚さ0.3m余りの包含層が堆積がみられ、その包含層の下に遺構を検出した。遺構は、竪穴住居跡2棟、溝跡1条、ピット200余りが検出できた。包含層からは、多数の弥生時代中期後葉から後期前葉の土器片や表3のような様々な石製品とサヌカイトチップが多数出土した。特に、石製品の中ではサヌカイト製の石鏃が突出して多く、器形も様々であった。

サヌカイト製

器種	個数
石錐	102
石錐	11
石槍	4
石庖丁	1
スクレイパー	1

結晶片岩製

器種	個数
石庖丁	1
石斧	3
磨製面がある薄片	5

その他

器種	個数
たたき石	10
石皿	2
石錐	5
管玉	2

表3 I区包含層出土石製品

### 3. まとめ

引田町内では、今まで弥生時代の遺跡については表面採集で遺物が発見されているのみであって、本格的な発掘調査も実施されることがなかった。しかしながら、今回の発掘調査で竪穴住居を伴う遺跡の存在が確認できた。このことにより、引田町における弥生時代の人々の生活のあり方の解明の糸口になることができる遺跡だといえる。また、本遺跡の特徴として、サヌカイト製の製品をはじめとしての多数の石製品とサヌカイトチップが多数出土していることから、サヌカイトを持ち込んで石鏃を中心に石器を作った遺跡ではないかと考えられる。より詳しい本遺跡の性格付けについては、今後本報告に向けて、整理検討をしていく必要がある。

報 告 書 抄 録

ふりがな	しこくおうだんじどうしゃどうけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはくつちようさがいほう							
書名	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
副書名								
巻次		シリーズ名		シリーズ番号				
編著者名	長元茂樹・植松邦浩・西岡達哉・樋本清輝・濱松春水・片桐孝浩・喜岡永光・森格也・岡本利・池田道雄・山元素子・宮崎哲治・多田慎・松岡宏一・香西亮・豊島修・野崎隆亨・住野正和・信里芳紀・長井博志・乗松真也・森澤千尋・多田歩・東条貴美・糸山晋・森川歩・香川直孝・藤澤正則・大屋敷慶子・山坂浩樹							
編集機関	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4							
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団四国支社・建設省四国地方建設局・香川県土木部							
発行年月日	1998年3月31日							
頁数	総頁数	目次等	本文	総表	挿図枚数	写真枚数		
	142	8	134	3	116	88		
ふりがな	ふりがな	コード	緯度・経度		調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町	遺跡	北緯				東経
かみてんじんいせき 上天神遺跡	かがわけんたかまつ 香川県高松 しかみてんじんちよう 市上天神町	37201		34°18'29"	134°02'21"	1997.8.1~ 1997.9.30	190m <sup>2</sup>	
はやしほうじろいせき 林・坊城遺跡	かがわけんたかまつ 香川県高松 しはやしちよう 市林町	37201		34°18'08"	134°05'30"	1997.10.1 ~ 1997.11.30	490m <sup>2</sup>	
まえだひがし 前田東 なかわら 中村遺跡	かがわけんたかまつ 香川県高松 しまえだひがしまち 市前田東町	37201		34°17'40"	134°07'12"	1997.10.1 ~ 1998.3.31	4,040m <sup>2</sup>	
くすたにいせき 楠谷遺跡	かがわけんおおかわ 香川県大川 ぐんおおちちようみず 郡大内町水 しくすたにい 主楠谷	37303		34°12'10"	134°24'58"	1997.7.1~ 1998.3.31	1,500m <sup>2</sup>	
にしやだにいせき 西谷遺跡	かがわけんおおかわ 香川県大川 ぐんおおちちようかわ 郡大内町川 ひがし 東	37303		34°13'58"	134°19'46"	1997.6.1~ 1998.3.31	2,092m <sup>2</sup>	
わらまにいせき 原間遺跡	かがわけんおおかわ 香川県大川 ぐんおおちちようかわ 郡大内町川 ひがしはらま 東原間	37303		34°13'52"	134°20'09"	1997.4.1~ 1998.3.31	18,893m <sup>2</sup>	
なりしげいせき 成重遺跡	かがわけんおおかわ 香川県大川 ぐんしりとちちようしろ 郡白鳥町白 とりなりしげ 鳥成重	37302		34°13'39"	134°20'50"	1997.4.1~ 1998.3.31	24,288m <sup>2</sup>	
ぜんもんいけにしいせき 善門池西遺跡	かがわけんおおかわ 香川県大川 ぐんしりとちちようしろ 郡白鳥町白 とりたにい 鳥谷	37302		34°13'38"	134°21'09"	1997.11.17 ~ 1998.3.31	3,566m <sup>2</sup>	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度		調査期間	調査面積	調査原因
		市町	遺跡	北緯	東経			
あんのたにいせき 庵の谷遺跡	かがわけんおおかわ 香川県大川 ぐんひけたちようくれ 郡引田町黒 はしもない 羽下内	37301		34°12'10"	134°24'58"	1997.10.1 ～ 1998.3.31	3,000m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
上天神遺跡	弥生時代		溝・旧河道		弥生土器			
林・坊城遺跡	縄文時代晩期 ～古墳時代		自然河川		縄文土器・弥生土器 ・須恵器・石器			
	弥生時代		円形周溝墓・土坑		弥生土器			
前田東・中村 遺跡	奈良・平安時代		溝		須恵器・土師器・瓦			
	鎌倉・室町時代		掘立柱建物・地鎮ピ ット・溝・井戸		土師器・北宋銭			
楠谷遺跡	弥生時代後期		掘立柱建物・溝・自 然河川・柱穴		弥生土器			
西谷遺跡	弥生時代後期		溝		弥生土器・石製品			
	鎌倉・室町時代		掘立柱建物・溝		土師器			
原間遺跡	弥生時代		竪穴住居・掘立柱建 物・土壇墓・土器棺墓 ・溝・柱穴・自然河川		弥生土器・勾玉・木 製品(杵)・石器			
	古墳時代		竪穴住居・掘立柱建物		土師器・須恵器			
	平安時代		掘立柱建物		土師器・須恵器			
成重遺跡	弥生時代中期		集石墓・竪穴住居		弥生土器(壺・甕・ 高坏・鉢)石器(石 鏃・石庖丁)			
	弥生時代後期		集石墓・土坑・竪穴 住居・土器棺墓・方 形周溝墓		弥生土器(壺・甕・高 坏・鉢)石器(石鏃・ 石庖丁・石斧)鉄器			
	古墳時代前期		竪穴住居・土坑・柱 穴		土器・玉・鉄器・土 製勾玉			
	奈良時代		掘立柱建物・土坑・柱穴		土師器・須恵器			
	室町時代		掘立柱建物・土坑・柱穴		土師器・須恵器・青磁・鉄器			
善門池西遺跡	弥生時代中期～後期		柱穴		弥生土器・石器(石錘)			
	室町時代		柱穴・土坑・溝		土師器・白磁・鉄器			
庵の谷遺跡	弥生時代		竪穴住居・溝・柱穴 ・土坑		弥生土器・石器(サ ヌカイト製石鏃・石 錘・石槍・結晶片岩 製石斧片)			

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

平成9年度

平成10年3月31日

編集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県埋蔵文化財研究会

印刷 成光社

本書は、著作権者の許可を得て香川県埋蔵文化財研究会が発行したものである。